

ツマイモ関係者に利用していただきたいと思っている。

つまり、「当社ではこんなイモ製品をつくってみました」、また、「当方では、このような資料をつくってみたが……」などというものは、ぜひ展示してPRしていただきたいと思っている。更に、「こんな情報が欲しいが」という問合せに対しても、なるべく要望に沿うようにキチンと答えたいと考えている。何

いも類振興に尽くした人々(1)



川越の甘藷先生
赤沢仁兵衛

川越いも友の会理事 井上 浩

川越のサツマイモの先生

関東で「サツマイモの先生」といえば、青木昆陽だが、川越地方の甘藷農家にとっては、もう一人先生がいる。赤沢式甘藷栽培法で有名な、赤沢仁兵衛あかざわにへえ(天保8年～大正9年)だ。農山漁村文化協会の『明治農書全集 第1集』、『第4巻 畑作』(昭和60年)に、晩年の彼がまとめた『赤沢仁兵衛実験甘藷栽培法』(明治43年初版、同45年再版)が入っている。そしてその意義を、編者の山田龍雄氏がこう書かれている。

「明治期のサツマイモの専門書で、系統的に書かれたものは意外なほど少ない。全国で3冊ほどしかないが、その中で赤沢氏のものが一番意味がある」と。

サツマイモ裁判

赤沢仁兵衛は天保8年(1837)、今の川越市

か相談事があれば、真剣に対応したいと考えている。

どこまで私自身が出来るか、未知数の部分が多いが、ぜひ、友達感覚で資料館を利用していただきたいと考えている。

いずれにしても、ぜひ一度おいでになって、いろいろとお話しをしていてもらいたいと思っている。

今福739番地に生まれた。天保といえ、すでに川越イモが日本一のイモになっていた時だ。

彼の略歴は、『赤沢仁兵衛実験甘藷栽培法』の初版本にある。同書は今福の有志が刊行会を作って出したものだが、その会の名で「赤沢仁兵衛君略歴」を載せている。有名なサツマイモ裁判事件は、ここにある。

それによると仁兵衛は慶応元年(1865)、同じ今福の147番地の赤沢家の婿養子になった。

ところでその畑は少なく、5反ほどしかなかった。いわゆる「5反百姓」だ。しかも当時としては大金の、800円もの借金を抱えていた。

ふつうのことでは、とうてい家を興すことのできないことを知った仁兵衛は、当時、もっとも有利な商品作物とされていた、サツマイモの増収を図ることとし、必死で研究した。

すると効果はたちまち現われ、数年で従来の2倍以上も取れるようになった。

ところが畑の少ない仁兵衛がたくさんのイモを売るので、「あいつはどこかのイモを盗んでいるに違いない」と疑われ、ある人に川越の奉行に訴えられてしまった。

その時、怒った彼の妻は、「疑うなら、う

ちのイモ畑を掘ってみてからにしてくれ」と奉行に直訴した。そこで役人が出張してきて掘ってみると、ほんとうに普通の畑の倍以上もあり、作付面積と甘藷問屋の帳簿とが合った。

おかげでイモ泥棒の疑いが晴れ、仁兵衛はかえって奉行から一層研究するようにと励まされた。こうして仁兵衛のスタートは波瀾に富んだものだったが、その後はかえって研究しやすくなり、村人たちからも教を乞われるようになった。

実験中心主義

小学校もなかった頃に生まれた仁兵衛の先生は、なによりも実験だった。サツマイモの増収にとって、少しでも良いと思われることは片っ端から実験している。そして結果の良かったものだけを真理とした。

こうして彼はサツマイモの増収法を開発し

つつ、それで借金を返し、畑を買い増して、ついには2町歩もの畑持ちになった。しかもその間に、乞われれば、だれにでも増収法を伝授した。それを集大成したのが、『赤沢仁兵衛実験甘藷栽培法』であり、ここにも「実験」の文字が大きく出ている。

では、その要点はどんなことだったのだろう。「苗半作」ということばがあるように、サツマイモ作りの最大のポイントは苗にある。

種芋を吟味し、高設温床の管理に注意して、太くて、かたい、節が詰まった苗を作る。

肥料は多投。従来は肥料をやると地上部が徒長しすぎてイモができないとされていたが、増収には肥料を多投したほうが良い。

1反当り、堆肥、300貫、米ヌカ、60貫、わら灰、20貫は入れたい。

<梅毒とジャガイモ>

マルコポーロの『東方見聞録』によって刺激されたコロンブスが、黄金を求めて大西洋を横断し、1492年に西インド諸島を発見して以来、征服者、探検家、あるいは移民などが続々と新世界を目指した。この結果、多くの植物が新世界からヨーロッパへ持ち込まれた。その中の根菜類としては、ジャガイモ、サツマイモ、タピオカイモ、ヤマイモなど、果実類としては、トマト、パパイヤ、バナナ、イチゴなど。そのほかカボチャ、トウモロコシ、トウガラシ、コカ、ナンキンマメもあった。これらの中では、ジャガイモが最高の贈物であったと言えよう。これらの大部分は、今日私どもの日常生活に不可欠なものとなっている。しかし、新大陸から入ったものとは気がつかないことが多い。たとえば、トマトはヨーロッパ、ナンキンマメは中国生まれと思われることが多い。動物では、七面鳥が新大陸から入っており、タバコや梅毒も入ってきている。

梅毒は、中米ハイチ島あたりの原住民の一種の風土病であったと言われているが、コロンブス一行によってヨーロッパに持ち込まれ、わが国には永正9年(1512年)に入っている。ポルトガル人が初めてわが国へやってきたのは天文10年(1541年)であるから、梅毒は西洋人より一足先にわが国へやってきたわけである。つまり、梅毒はコロンブス後わずか20年で日本にきたが、ジャガイモでは5、60年もかかってきた。

<一味同心>

昭和62年ゴッホの絵「ひまわり」を安田火災が約53億円で落札し、話題になった。翌63年12月には、オランダ東部の都市ロッテルムの国立クレラー・ミュラー美術館に何者かが侵入し、ゴッホの絵「ジャガイモを食べる人々」(Potato eaters)や「赤いひまわり」など計3点(合計数千ドル相当)を持ち去ったという。「ジャガイモを食べる人々」は、「ひまわり」に匹敵する価値があり、その行方が心配である。この絵は、つましい食卓に向かった光景を描いた油絵3連作の1つで、ゴッホ初期の傑作とされている。1日の仕事を終え帽子をかぶったままのまづしい農民が、ランプの下で1つ皿に盛ったジャガイモを素手で食べている風景、つまり、いわゆる「同じ釜の飯を食った仲」を描いたもの。飯場の一緒の部屋で過ごし、学生寮で袋入りポテトチップをいつも食べている「イモダチ」を描いたとも言える。

「食べられることの有難さ」を知らない世代では、芋よりも仲間とつまむチップスの中に、共通の心が育っている。西洋でもナイフやフォークは、昔からあった訳ではない。大皿から直接手でつかんで食事をする習慣は各地にある。国、時代、文明が違っても、一味同心は心が通じあう。

仏語アミ・シャネルは、「骨肉の友」、「血のつながった、親しい仲」のことであり、英語のコンパニオンは「仲間」の意味で、原義は「ひとつのパンを食べあう人達」で11世紀末にできた言葉のようである。

(北海道立中央農業試験場主任研究員 浅間和夫)

バレイショ増収一〇〇〇問答

■三百回余りの講演で、いも作従事者からいたいた千四百余の質問を整理し、これに回答。基本から植付け、収穫・防除までを解説し、厳しさが加わる現代農家に大きな指針を示す好著。北大助教授・吉田稔著 定価七〇〇円 送料二五〇円

清薯源流の砦

■現在の種苗管理センターのいも作関係は、昭和二二年に創設された「馬鈴しょ原種農場」がその出発である。各農場の歴史と現況を報告した本書は、関係者必携の好資料。各農場職員名簿付。いも類振興会編・定価七〇〇円 送料二五〇円

21世紀に向けてのいも作り

■生涯を北海道のバレイショ作に投入した著者快心の著作。その視野は需要者の品質要望から国際競争力まで、魚眼レンズのようにひろがり、いも作従事者の今後の指針を示す。

吉田稔著 定価六〇〇円 送料二五〇円

アンデスから食卓まで

■ジャガイモのふるさとアンデスから出発し、その料理法や品種の特性、栽培から食卓への供給までを、オールカラーで紹介。読んで楽しく、為になる小冊子。

田中智著 定価三〇〇円 送料一七〇円

熱帯アジアの馬鈴薯生産

■東南アジアの馬鈴しょ生産の実態を、各国のレポートから翻訳した貴重な資料。とくにシンポジウムでの発表は、わが国馬鈴しょ作に大きな示唆を与えるものである。

秋元喜弘著 定価八〇〇円 送料二五〇円

うね立ては、できるだけ高く立て、苗は、1反当り、3,800本から4,000本と多植する。苗さしの適期は、小麦の花の咲く時で、さし方は釣針型。

これらを「赤沢式」と自称し、従来の工夫らしい工夫のないやり方を「旧式」とした。仁兵衛によれば、旧式では良くて1反当り、5～6駄（12貫入り俵、3俵で1駄）しか取れなかったのが、赤沢式なら、習熟すれば30駄は軽いとしている。実に5～6倍も引き上げているのだから、すごい。

なお仁兵衛の時代の川越イモは、アカヅル、アオヅルの2種類だった。現在の川越イモはベニアカ（紅赤）だが、これは明治31年に今の浦和市の山田いちが発見したもので、それが川越イモの主流になったのは大正期に入ってからだった。

アカヅルはアオヅルよりも品質が良く、値

段も高かった。ただアオヅルと違って、やせ地を嫌い、しかもたくさんの肥料が必要だった。赤沢家に現存する「甘藷試作成績表」（明治42年）などを見ると、仁兵衛が一番力を入れていたのは、アカヅルの増収だった。

赤沢仁兵衛は大正9年、84歳で亡くなった。戒名は「仁山道光晴居士」。墓は彼が終生、研究の手をゆるめなかったイモ畑のまん中にある。

(1989. 2. 5)

いも類振興情報 第24号

平成2年7月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-588-1040
振替・東京 3-110152
印刷所 交通印刷株式会社